

東京地本として、今まで多くの職場で返還請求をしてきて、カメラやビデオ、パソコンなどが戻ってきましてけれども、組合費では今のところ戻ってきた総額は約1326万円です。お金以外にも、A4用紙10万枚、A3用紙7万枚を注文しているにも関わらず地本にはない、10万円くらいするICレコーダーを購入しているのに地本にないとか、まだまだ相当ありますので随時返還請求を行いたいと考えています。長期間にわたってこの課題は取り組むこととなりますが、発言にもありましたが、職場に過度な負担をかけないように職場の意見を十分に考慮しながら進めていきたいと思えます。

**情宣部**：組合員それぞれ感じ方や考え方が違うので、返還請求に限らず、取り組みを進めていくにも職場の声は大事ですね。

**柳**：感じ方はいろいろで、「新生JR東労組がどのように生まれ変わるのか見てみたいから残った。組合員以外の人たちを含めて今後JR東労組がどうなっていくのか」ということを非常に興味を持って見ている」という発言もありました。これから職場のことをやってくれる、自分たちと同じ目線で考えてくれる、そういうJR東労組になってくれるのではないかと期待感だと思えます。

グリーンスタッフ社会人採用の方からは「格差ペアで本当にストを打つべきなのか

**情宣部**：コロナ禍での経営危機ということもありますが、コロナに関してアンケートを行ってきたと聞いています。

**柳**：コロナ感染症に対する様々な取扱いに対して意見が出されておりましたので、大会に向けてアンケートを行ってきました。「感染しない・させない」対策を講じていくことが前提ですが、どのような対策が必要なのかアンケートしてきました。



という疑問を感じていた。スト権議論は賛成できなかった。東京は、あれば不当労働行為だということでスト権に対する総括をしないまま不当労働行為の問題をすり替えたいけれども、本部はあのスト権議論は間違っていたと総括した。これには感銘を受けた」という発言もありました。

あとは、休業指示に対して職場では不安の声が多く出ています。「初めての経営危機という中でJR東労組に入っていれば大丈夫ですよ」という交渉をしてほしいし、会社を支えていくというスタンスをはっきり見せて欲しい」という発言がありました。今の経営危機ということを経営者は危機感として捉えているということ。情勢含めて分かりやすく事実を伝えていくことや、どのように労使が議論しているのかということを発信していくこともこれからの重要な取り組みだと感じるところです。

## II・赤字コロナ禍に対し東労組としてどうしていくか

記述欄には「どうせ書いても何もやらないのだから期待するものはない」と書かれているものもあって、非常に胸が痛くなりました。しかし、勤務なども含めて改善して欲しいという声が多く集まりましたので、執行委員会を経て、申一号としてこれから申し入れを行い、特に勤務の扱いなどを重点的に議論していきたいと思っております。

**情宣部**：コロナで仕事も生活も大変ですし、JR東日本も赤字決算となる社会状況です。この状況に対してJR東労組としてどのように組合員の雇用と生活を守っていくかが大きな課題ではないでしょうか。

**佐藤**：9月9日に「雇用と職場を守るためのJR東労組緊急提言」を發出しました。コロナ禍で集まって議論することが難しい状況ですが、第一四半期決算を踏まえた職場討議資料などを活用して組合員の皆さんと危機感を共有し、なぜ労働組合・JR東労組が必要なのかということ議論し、発信していただいています。JR東労組の最大の価値基軸は「雇用と安全」と「職場を守る」ということです。現コロナ禍において、本場にJR東日本全体の危機感になっているのか、労働組合だけではなく会社経営陣に対してもそういった意見が職場からも出されています。JR東日本をはじめとする公共交通機関の需要がこれから高まるのかということを見ると、極めて雇用の危機に繋がっていきます。労働者の雇用を守ることを考えると、JR東労組の組織強化が実現していかないと極めて厳しい1年となると思います。だからこそJR東労組への最大の結果を呼びかけていく体制をつくっていきます。

新聞紙上では「コロナ解雇5万人」と言われています。さらには「富士通8万人テレワーク・通勤定期廃止」などが掲載されています。JR東日本でも、深澤社長は「利用水準は元に戻らないと考えており、事業継続には抜本的な構造改革が必要」と述べています。他の企業では、事業を再構築する手段としてこれまで「リストラ」が行われてきていました。そのことから労働組合の組織強化・拡大なくして労働者の未来はないのです。現実に向き合い、現実から学び、一人ひとりが主体性をもって運動を一緒に担うことが、労働組合にとって必要な姿ではないかと思えます。

**柳**：この提言を出す意味は非常に大き

いと思えます。私は国鉄改革を経験してしますので、赤字は簡単な問題ではなく、特にJRのように固定費が80%を占めるような企業は大変なことになると思えます。絞れるところは人件費だとか様々な施策に反映して行くと思えますけど、我々の雇用に関わる問題にならざるを得ないということとを私たちは受け止めておかなければならないと思えます。国鉄改革の時はバブルです。仮に国鉄を去るにしても、政府も含めて民間もいろいろな再就職先を用意する中で改革に入っていくんです。その状況と比べるといま全く逆なんです。経済が先行き不透明な中で、コロナ禍で5万人がクビを切られて、そしてテレワークが中心になり通勤定期が廃止されていくという世の中の流れです。私たち労働者の将来を見据えた場合には非常に危険な状況にあると思えます。

社宅に15年しか居られないという制度の中でマンションや自家を買っている人も多いと思えます。将来にわたってローンを組む人も多いと思えますが、経営が順調なことを前提にローンを組むという社会ではなくなってきました。社会情勢を見定め、しっかりと労働組合の側から我々の職場と雇用と生活を守る意味で企業を守ることが重要なことだと思えますので、提言に基づいて私たち東京地本も職場の組合員と、私たちに出来ることは何なのかということについて議論していきたいと思えます。



## III・今後どのような組織をつくっていくのか

**情宣部**：最後に、今後についてお話をいただきたいと思えます。

**佐藤**：中央本部はこれまで各種施策や制度について議論を行ってきました。労働組合だからこそ会社との議論によって会社の問題意識などを組合員に明らかにし、議事録確認を締結してきました。私たちは労働組合だからできることを堂々と行い、JR東労組への結果を呼びかけていきます。敵しい社会情勢であり、私たちを取り巻く状況を認識し、組合員の雇用と職場を守るために、赤字とコロナ禍を乗り越え、鉄道・バス・医療の安全を守ることを最大の価値基軸に据え、「安全・健康・ゆとり」が損なわれる事象に対しては労使議論を通じて解決していきます。労働組合は改良組織です。アフターコロナ社会で訪れる様々な働き方の変化と、経済構造を学び、JR東労組だからできることを組織全体で検討し、議論をしていく、その場が11月の政策フォーラムだと思っています。

組織強化・拡大を実現しなければJR東労組の未来はないという危機感や、労働組合としての政策提言や問題提起を組合員と一致させ、様々な手段を活用して組合員と共にJR東労組を再生することが私たちの課題です。

**情宣部**：東京地本はいかがでしょう。

**柳**：JR東労組への不信感というのは払拭されていない現状だと思っています。そのことを受け止め、組合員の気持ちに大切にしていきます。私が青年部長をしていた時に「リーダーになるなら聞く耳を持つ」と組合員から指摘をされました。その当時の私はあれをやら、これをやらと上から目線で組合員に押し付けていたということとを心がけてきました。組合員が困っていることについて寄り添えるのが労働組合の

任務だと思っていますので、もう一回JR東労組に対する求心力を取り戻すためにも、私は「聞く耳を持つ」組合員に接していきます。

労働組合は組合員のための組織であり、その最たるものは雇用確保と労働条件の向上だと思えます。このような経営危機の時に業務の縮小を理由に解雇されるようなことになれば大変です。しかしJR東労組は協約を結んでいますから、当然労働組合との協議が必要となります。どこにも所属していない方は会社に解雇を通告されればそれで契約行為は終了となってしまいます。そのような労働協約に保護されない非組合員が多くなるので、そういう人々たちを再結集を訴えていきたいと思えます。

JR東労組の基底には抵抗とヒューマンズムがあります。モノを申すときはしっかりと申して、やるべきことはやる。組合員の目線に立ってたかいかを共につくり、相手の気持ちを理解する。そういうことが必要なことだと思っています。これからの現場目線でJR東労組の求心力を高めながら、会社経営陣にもモノを申せる、そういう強いJR東労組を取り戻すために奮闘したいと思います。

